

ノディングスのケアリング論から保育実践への 認識論的、倫理的示唆 —受容性の概念に着目して—

よし くに よう いち
吉 國 陽 一

〈要 旨〉

本稿は保育実践の認識論的、倫理的次元を理論化するための示唆を与えるものとして、ノディングスのケアリング論を受容性の概念に着目して検討することを目的とする。保育者の子ども理解という認識論的次元についての考察と子どもに対して何をなすべきかという倫理的次元の考察との関連を問うために、子ども理解と保育目的の形成との関連性を考察の中心に据えた。

ノディングスのケアリング論においては受容としての共感がケアリングの基礎にあるものと考えられていた。受容のプロセスにおいては対象を自分の目的に即して変えることを目指す操作的、同化的なモードから対象をあるがままに理解する受容的なモードへの移行が必要とされていた。このプロセスを通して認識の主体は受容を被り、対象に対する応答としての「私はしなければならない」という責務が生じることが示唆されていた。ノディングスのケアリング論は保育者が子どもの理解に応じて保育目的を変化させ、新たな保育目的を形成していくプロセスを理論化する可能性を含意するものであった。

最後に、ノディングスのケアリング論を通して得られた示唆を具体的な保育実践の理解へつなげるために津守真の保育実践記録の分析を試みた。ここではS夫という子どもを受容することを通じた津守の理解の変化と、S夫への応答としての新たな保育目的(「私はしなければならない」)の形成過程を見た。

〈キーワード〉

ケアリング、受容性(receptivity)、応答(response)、共感(empathy)

I. はじめに

本稿の目的は子どもの理解を基盤とする保育者の実践を理論化する上での倫理的、認識論的示唆を提供するものとして、ネル・ノディングス(Nel Noddings)のケアリング論における受容性(receptivity)の概念に着目し、検討を加えることである。そのために本稿では保育者の子ども理

解と保育目的の形成との関係性について、ノディングスの受容性の概念の観点から考察を加える（「Ⅱ. ノディングスのケアリング論における受容性の概念」）。その後、児童心理学者でありながら、自身も保育者として実践に携わってきた津守真の保育実践をノディングスの受容性の概念の観点から分析することで、この概念が保育者の省察的实践を理解するための理論的枠組みとしても有効性について示唆したい（「Ⅲ. 津守真の保育実践における受容性と応答」）。

保育実践において子ども理解の重要性が従来より強調されてきた。上村(2015)は保育者の子ども理解を巡る研究動向をレビューしている。上村は子どもと保育者の関係性に着目した理論的枠組みとして、ノディングスのケアリング論、佐伯のドーナッツ理論、佐伯のケアリングの三次元モデル、鯨岡の関係発達論の四つを紹介し、これら四つの枠組みに共通する子ども理解の根底要因として、保育者の子ども理解が子どもと相互にかかわり合う中で成されること、保育者と子どもの関係が双方向的であるということの二点を指摘している。上村は子ども理解が保育実践においてかくも重視されること背景として、幼稚園教育指導資料や保育所保育指針解説書といった日本のナショナルスタンダードの中で子どもと同じ地平に立ち、多角的に内面を推測し、理解することが保育実践の原点として、また保育者の専門性の中核を構成するものとして重視されているという事情を挙げている。

近年では保育実践のみならず、心理学における子ども理解のあり方にも理論的変革の兆しが見られる。レディ(Vasudevi Reddy)(2015)は著書『幼児はどのように心を知るか』の中で心理学研究において研究者が対象である子どもとの関与を排した三人称的アプローチのみを用いてきたことの限界を指摘し、研究者による関与を通して子どもを理解する二人称的アプローチの導入の必要性を提起している。佐伯(2013)はレディの研究に着目し、これが乳幼児の発達研究のみならず、教育や看護、介護、医療臨床などにも広がりを持つ考え方であると主張する。佐伯はレディの二人称的アプローチの有効性を示す事例として自らがゼミ生とともにに行った研究を挙げている。この研究で佐伯らは初産婦が入院中に受ける育児指導に二人称的コミュニケーションを導入することで母親が育児を楽しむことができるようになり、母親としての自信と自覚を持って退院できるようになったと述べている。佐伯は病院における育児指導において、本来人と人のかかわりにおいては自然であるはずの二人称的アプローチが抑圧されて三人称的アプローチに正当性が付与されてしまっていることの問題点を指摘している。このことは特定の時代の科学研究における要請という特殊な事情から生まれた三人称的アプローチがその本来の適用範囲を越えて権威化され、教育、福祉、医療といった実践の領域をも規定してしまっていることを意味するものであり、子ども理解という営みの政治性を浮き彫りにしている。

以上のような状況から、近年の研究の中で子ども理解がそれだけで孤立した営みとしてではなく、保育者と子どものコミュニケーションの中の一局面として位置づけられていることがわかる。認識そのものを目的とする科学研究とは異なり、保育実践においては子どもをいかに理解するかという認識論的次元が子どもに対して何をなすべきかという当為について問う倫理的次元と密接

に結びついている。ここで倫理的次元とは社会的慣習や抽象的原理のように、教育実践の外に存在する規範領域としてではなく、ハンセン(David Hansen) (2001)が言うように他の人間により善い影響を与えようとする意図的営為という、教育実践そのものに内在する倫理的側面のことを指す。村井(1988)はギリシア語において教育を指すパイディアという言葉の歴史的な使用を分析する(村井の言葉では発生的定義)ことを通して、教育(パイディア)が子どもを善くすることを意図した働きであったことを指摘している。村井はまた、教育をどのように定義するかという問題と教育の対象である子どもをどう見るかという問題とを結びつけて論じている。村井は相手の意思と関係なく教育者の目的としての善さを設定して働きかける「飼育」とは区別されるものとして「教育」を定義しようとするならば、子どもを自ら善さを探り、身をもって作り出そうとする存在と見て、教育者が子どもと力を合わせて何が善いかを探りながら、それを確認したり、実現の方策を求めたりすることになるという。

上記の議論から、少なくとも教育、保育実践における子ども理解を問題にする限りにおいて、子どもをいかに理解するかという問題は、その理解に基づいて保育者が子どもに対して何をなす「べき」か、何がより善い選択であると言えるかという倫理的判断の問題と切り離すことができないことがわかる。子ども理解を基盤とした保育実践を理論化する上では行為と切り離された従来の認識論の枠組みを越えて、行為の善し悪しを問う倫理的次元と結びついた倫理的、認識論的な枠組みが不可欠であると言えるだろう。

このことは認識と行為、事実と当為といった二元論の克服という哲学的難問に対して保育者の実践的認識論の観点からアプローチすることを意味する。佐伯(2013)はムーアの『倫理学原理』に依拠しつつ、保育実践において子どもが望んでいること、保育者が望んでいること、といった「望んでいる」ことから「望ましいこと」を導出することはムーアの言う自然主義的誤謬を犯すものであることを指摘し、教育や保育において「善さ」を論じることの難しさについて述べている¹⁾。

本稿ではノディングスが倫理の構成原理として提出したケアリングにおける認識論的側面について、その倫理的側面との関係性を考察の俎上に乗せることでこの難問に対するアプローチを試みたい。ノディングスのケアリング論は本来倫理思想ではあるものの、関係に立脚した倫理思想であるため、ケアリングの倫理的側面は関係する対象である他者や動物、植物、事物、観念等に対する認識のあり方と切り離すことができない。ノディングスのケアリング論の認識論的側面から保育者の子ども理解を、倫理的側面から子どもを善くすることを目的とした働きかけをそれぞれ理論化することができると思う。

ノディングスのケアリング論の認識論的側面に着目した事例として「わざ」の教授と習得を知識論の文脈から問い直すことを目的とした生田(2007)の論稿が挙げられる。生田はノディングスのケアリング論に着目し、「わざ」の教授と習得を「教える者」、「学ぶ者」、「教える内容」、「他者」、「事物」、「観念」などの間の重層的なケアリング関係の構築プロセスとして理解することの必要性を提起している。また、前述の上村(2015)の研究においてもノディングスのケアリング論が保育者の子ども

理解という認識論的文脈において取り上げられている。本稿では上村と同様に保育者の子ども理解という認識論的側面に着目しつつ、倫理的側面(保育においては保育者の子どもへの働きかけのあり方)とのつながりにも焦点を当てることで認識と行為の両側面から保育実践を理解する手掛かりとしたい。

本稿では保育における倫理的、認識論的問題の考察の一助として、ノディングスのケアリング論の観点から保育者の子どもに対する理解と保育目的の形成との関係について検討する。保育目的の形成にはハンセン(2001)や村井(1988)の言う子どもに対してより善い影響を与えようとする保育者の意図的営為が表れると考えられるからである。

保育実践における目的の形成は『幼稚園真諦』(倉橋 2008)における倉橋の以下のような思想に基づくなら、子ども理解のあり方と相即的なものであると言える。

「言うまでもなく、目的なしには一切の教育は存在しないのですが、目的だけで教育はあり得ない。その目的をどういうふうにして、対象の特質に適応させていくかの工夫があって始めて、そこに教育の実際があります。」(倉橋 2008, p.14)

倉橋は幼児期の教育においては教育の対象である子どもが自ら教育を受けようという考えをもって教育者の目的を受け取ることができないため、特に対象本位に計画される必要があると述べている。ここから幼児のさながらの生活を基盤とした保育という周知の倉橋の思想が帰結する。

「私はいつもよく、生活を生活で生活へ、という何だか呪文のようなことを言っています。が、この生活を生活で生活へという言葉には、その間に教育ということを寄せつけていないように聞えますが、もちろん目的の方からいえば、どこまでも教育でありますけれども、ただその教育として持っている目的を、対象にはその生活のままをさせておいて、そこへもちかけていきたい心を呪文にし唱えているに外ならないのです。…(中略)…子供が真にそのさながらで生きて動いている所の生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていくことは、なかなか容易ではないかもしれない。しかしそれがほんとうではありますまいか。」(ibid., pp.23-24)

対象である子どもの方に目的を適応させていくという観点に立つとき、必然的に目的は予め設定されるものではなく、子ども理解に依拠して形成されるものとなる。

では、こうした子ども理解と保育目的の形成との関係を理論化する上でノディングスのケアリング論はいかなる示唆をもつのか。ノディングス自身はケアリングを理論化するにあたり、教師と生徒や親子のケアリング関係を対象として論じているが、特に幼児教育における教育者と子どもの関係に焦点化した考察は展開していない。しかしながら、後述のように本稿が着目するノディングスのケアリング論における受容は操作的、同化的モードの放棄とケアする相手とのかかわりを通した自分自

ノディングスのケアリング論から保育実践への認識論的、倫理的示唆—受容性の概念に着目して—
身の変容というプロセスを含むものであり、このことは保育者の子ども理解と保育目的の形成をつな
げる理論的手掛かりとなると考えられる。

II. ノディングスのケアリング論における受容性の概念

1. 投影 (projection) と受容 (reception)

まずはノディングスのケアリング論における受容性の概念について検討する。

ノディングスのケアリング論においてはケアする人がどのように他者と「ともに感じる (feeling with)」ことができるかが重要視される。ノディングスは1984年の著書『ケアリング -倫理学と道徳教育における関係的アプローチ-2』(Noddings 2013)においてケアリングにおける不可欠の構成要素である共感 (empathy) の概念について、投影 (projection) と受容 (reception) という二種類の定義を区別している。ノディングスによれば前者は合理的、西洋的、男性的な共感の捉え方であり、対象に自分を投影することでそれを十全に理解する力を指す。他者の状況を外側から分析し、自分に置き換えて理解しようとするあり方である。

一方、受容においては投影のように対象 (他者) を客観的に分析し、自分ならどのように感じるだろうかと問うのではなく、他者と共に見たり聞いたりする。ノディングスはこの受容の状態を専心没頭 (engrossment) とも言い換えている。ノディングスはケアリング関係においてケアする側に必要とされるのはこの受容の態度であると考え、ノディングスは受容について、母子の関係を例に説明する。

「母親は全く自然に子どもと共に感じる。母親は自分自身を子どもに投影し、“オムツが濡れているとしたら私はどう感じるだろう?” などとは問わない。こうしたことをするのは自然な衝動が生じない時だけである。子どもが泣いている時、母親はごく自然にその子どもとともに反応し、何か具合が悪いのだと思う。どこか具合が悪いのだ。これは子どもの思いであり、私たち (母親である自分と子ども) の思いである。母親はそれを受容し、共有する。」(Noddings 2013, p.31)

ノディングスによれば、こうした場面で母親は子どもが泣いていることを解決すべき問題として捉えているのではなく、子どもと思いを共有しようとしている。相手に対して働きかけるというケアする側の能動性よりも自然に相手と思いをともにしてしまうという受動性がここでは際立っていると言える。

ノディングスは2002年の著書『家庭から始める-ケアリングと社会政策-』(Noddings 2002)において、投影と受容という二つの共感の定義を比較し、後者については共感 (empathy) よりも共振 (sympathy) という言葉の方がその感情的状態をよりよく表すものであると述べている。

一方、2010年の著書『母性的要因-道徳性への二つの道-』(Noddings 2010)においてノディングスは投影よりも受容を重視する立場に立ちつつ、このプロセスに共感の言葉を充てる。その上でノディングスは共振を共感のプロセスの中に含まれる一つの過程と位置づけている。投影ではなく、受容を重視する立場は変わってはいないものの、ここで二つの用語をあえてともに用いて説明を試みているのは受容としての共感の中に含まれる知的側面と感情的側面の複雑な関係に焦点を当てたかったからであると考えられる。ノディングスによれば本来は共振と共感という二つの事態は同時に生じるが、別々に生じることもある。例えば感情的に相手の気持ちに共振しつつ、盲目になってしまって正確に相手のことを知ることができないことがある。この場合、共感が生じていないと言える。逆に相手のことを正確に知るという意味で共感はしていても、そのことで余計に相手に共振することができなくなってしまう時がある。共感共振を保証するわけではなく、共振は共感に依存するわけでもない。

「したがって共感は様々なプロセスから成る布置(constellation)である。そこには注意、認知的理解や相手の心を読むこと(これらの結果は再評価されたり、されなかったりする)、共振することへの強い可能性と自分自身の共振的構造とのつながり、といった事柄が含まれる。何がこれらのプロセスを開始させるのか?一種の循環がここにはあるようである。いくつかのケースにおいては共感が共感を生じさせる。つまり、こうした経験を日頃から経験している人は既に“ケアする準備ができています”のであり、出会いに対して共感的な傾向性を持って臨むのである。時には愛がこのプロセスを動機づけるが、私たちは愛によって共感における正確さが損なわれることがあるということも知っている。愛は愛する者を薔薇色の光の下に見させるが、それは時とともに薄れる。また、時には状況やケアする人の特定の特徴がケアする人の記憶に作用し、共感的なプロセスが開始される。そして、時には直接的な共振が全ての事柄を開始させる。」(Noddings 2010, p.56)

上記のノディングスの言葉から受容が知的側面と感情的側面が複雑に絡み合う中で行われるプロセスであることが分かる。元々、受容は他者に対する客観的理解という知的側面が優位となる投影に対して感情的側面を強調して提起された概念であるが、ここでの説明から知的側面は受容においても重要な役割を果たしており、その用いられ方が投影とは異なるだけだということが分かる。ノディングス(2013)によれば受容においてはただ他者から受動的に影響を受けて感情的に共感するというのみならず、能動的かつ知的な反省的思考も要求される。

「受容的なモードは再帰的でも反省的でもありうる。というのも、世界や他者を受容する代わりに私は自分自身を受容することがあるからである。また、私は自分が既に受容したものに対して注意を向けることもある。こうした主観的・受容的モードにおいてこそ私は他者から受容し

たものをはっきりと知ることができる。その後、私は受容してきた真実を受け入れるのか、それを拒否し、拒否したことを自分自身、心地よく思うように納得させるのかを選択することになる。」(Noddings 2013,p.35)

このように、対象(他者)を受容するという前提において、自分自身の内面に目を向けるという反省的な知性も大きな役割を果たしている。ノディングス(2013)によればケアリングにおいて知性や合理性は消え去るのではなく、他者に対する専心没頭のために用いられるのである。

2. 操作的、同化的なモードの放棄から自分自身の変容へ

ノディングス(2013)によれば、受容性においては操作的、同化的なモードを放棄することが必要となる。操作的、同化的なモードとは対象を自分の望むように変化させることを目的としたかかわりである。ノディングスは対象をあるがままに受容するためにはこうした操作的、同化的な態度から受容的なモードへの移行が必要とされると言う。

「私たちは同化的なモードから受容的-直観的なモードへ変化することができる。受容的-直観的なモードにおいては、まだ私たちにはよく理解されていないプロセスを通じて対象を受容し、その対象が現れるがままに静かに身をゆだねることができる。・・(中略)・・こうしたモードにおいて、私たちはそこにあるものを評価や査定を可能な限り避けて受容する。私たちは道具的な世界から一步踏み出し、関係の世界にいる。私たちは目的をまだ確立していないか、既に確立した目的を一時棚上げした状態にある。私たちは世界を変えようとしているのではなく、自分自身が変容させられることを許している。」(Noddings 2013, p.34)

操作的、同化的モードにおいては対象に何らかの影響を与える(変化させる)ことを目指して目的を設定するが、対象の認識から行為に至るまでの過程において対象とかわる主体は変化を被らない。また、対象に対する理解も目的を設定する主体の関心に従ってなされるので、そのあるがままの姿をとらえることができない。

一方、受容的なモードにおいては主体の目的、関心が一時的に脇に置かれるため、対象をあるがままに受容することができる。また、受容的なモードにおいては対象の理解のみならず、主体のあり方もまた操作的、同化的なモードとは異なる。主体の目的や関心は不変のままに対象を変化させようとする操作的同化的モードとは異なり、受容的なモードにおいては対象のあるがままの姿に触れることで主体自身が変容を被るのである。

「受容は全く受動的であるわけではない。魂は(または自己は)己を空っぽにして問いを発する、または受容するための準備ができているというシグナルを発する。しかし、ここから発展して

くる状態は完全に関係的である。私が関係に対してこのように参加する時、私は重要な意味において二重性の状態にある。私は二組の目で見、二組の耳で聞き、私の痛みに加えて、他者の痛みを感じる。私の最初の自己は外からの影響にさらされ、こうした出会いの中で変容させられる。」(Noddings 2002, p.15)

私は自分の目的や関心を脇に置いて自分を空っぽの状態にするため、他者を受容して自分の視点とともに他者の視点からも世界を眺めることができる。このことを通して私は関係の中で変容させられ、関係を通して規定されるのである。

こうした受容性を基盤としたケアリングの関係をノディングス(2013)は数学が大嫌いな生徒と出会った教師を例に挙げて説明している。生徒に数学を好きにさせ、学ばせるという教師の目的に固執するならばこの状況は解決すべき状況となり、どうすれば生徒が数学を好きになる手助けができるかということが問題となる。教師は自分の現実(reality)を生徒に投影し、(私のように)数学を好きになってくれさえすれば大丈夫だと思う。しかし、ノディングスによればこうした操作的な教師のあり方はケアリングの視点から見た時、他者の現実を自分自身にとっての可能性として理解することを妨げるものとなる。ケアする人としての教師はこうした場合、自分の教育目的を一度脇に置いてまずは数学を嫌いというのはどのような感じなのだろう、と問うのである。

「もしもケアをするなら私にとって重要となるのは、彼が自分自身の内的自己に照らして彼に要求される数学を学ぶことを受け入れられるような理由を見つけることか、大胆に正直にそれを拒否することのどちらかである。数学が大嫌いというのはどのような感じなのだろう?それを学ぶことにどのような理由を見つけられるだろうか?このように考える時、私は彼を惹きつけるような報酬を与えることを拒否する。私は彼の興味を引きつけたり、態度を変えたりするように計画された眩いパフォーマンスから始めることはせず、できる限り彼自身の視点で物事を眺めることから始めるのである。数学なんて気が滅入る、混乱する、怖い、つまらない、つまらない、つまらない…一体どうしたらこんなものをやる気になるのだろうか?こうした観点から私たちは一緒に葛藤する。」(Noddings 2013, pp.15-16)

ここで教師は生徒に数学を好きにさせるという操作的、同化的な目的を固辞することはせず、彼自身の視点を理解しようとしている。この教師は数学の教師であり、数学が大嫌いな生徒の現実を自分に置き換えて理解することは困難であったと考えられる。操作的、同化的なモードから脱却することで初めて他者である生徒を受容する基盤ができるのである。このように受容的な態度で臨むならば、数学が嫌いな生徒とのかかわりを通して教師自身も変容させられると考えられる。

「I. はじめに」において倉橋に依拠しつつ、対象(子ども)への保育目的の適応、保育者の子ども理解に応じた保育目的の形成という視点を導入した。ここでノディングスが述べる受容性を通し

た主体の変容という視点は保育者の子ども理解と保育目的の形成を結び付ける手掛かりとなるのではないか。当初の教育目的を脇に置き、子どもを受容することで保育者自身の変容させられ、子ども理解に応じた新たな保育目的が形成されるのである。

3. ケアされる者の現実への応答としての「善さ (goodness)」

では、子ども理解に応じて形成される新たな保育目的はどのようなものか。保育実践における倫理的次元、保育者にとってどのような目的、行為がより「善い」かを考える視点はどのように生まれるのか。再びノディングスのケアリング論に依拠して考える。

ノディングスのケアリング論における「善さ (goodness)」はケアされる人の現実に対する応答の適切さと考えられる。ノディングス(2013)によればケアする人がケアされる人を受容した時、その現実に対して応答しなければならないという責務 (obligation) の意識が生じる。前述の「1. 投影と受容」において挙げた母親と子どもの例のように、受容が自然に生じる場合 (自然的ケアリング) においてはこうした責務の意識も自然に生じる (例えば泣き叫ぶ自分の子どもを苦しみを和らげるために抱きかかえなければならない)。

「私たち全てには全く自然にケアする瞬間というものがある。私たちは単にケアするのであり、どんな倫理的努力も生じない。“したい”と“すべきである”とはそのような場合に区別できない。私がすべきであると私や他人が判断しているものを私は行いたいのである。」(Noddings 2013, p.81)

「ここでの“善さ (goodness)”は自然なケアリングについての評価として私が言及してきたものである。私は事実としてあることが必然的に善いということを言いたいのではない。自然なケアリング-私たち一人ひとりが存在を維持するために依拠してきたもの-が私たちが不可避免的に“善い”と特定せざるを得ないような自然な状態であるということである。」(ibid., p.49)

自然なケアリングが成立する時、ケアする人はケアされる人を自然に受容し、ケアされる人が求めていることを理解する。そのため、何を「すべき」かが比較的容易に分かり、それを「したい」という感情も自然に生じる。ここでは欲求に反したカント的な義務という意味での道徳的努力が必要とされない。ケアリング関係の中で自然に他者に対して応答することが多くの場合に善さにつながる。

一方、受容が自然に生じない場合には倫理的な努力が必要とされる。ノディングスはこうした関係を倫理的なケアリングと呼ぶ。倫理的なケアリングにおいて「すべき」という内的な命令は自然なケアリング関係を通して育まれたケアし、ケアされる人としての理想的な自己 (倫理的な自己) から生じる。自然なケアリングが成立しない時、人はこうした倫理的な自己を参照するのである。

「私が他者を受容することが他者に対する“私はすべきである”を生じさせるのと同様に、私が理想的な自己についてのビジョンを受容することで“私はすべきである”は倫理的な自己に対して生じるのである。私は理想的な自己と理想的な自己についてのこの見通しがケアリングの産物であることを理解するのである。もちろんこうした自己に対するケアリングを受け入れ、肯定したとしてもそのことは私が正確に何をすべきかを決定してくれるわけではない。同様にケアリングそれ自体は私が他者のために何をしたらよいかを教えてくれるわけではない。しかし、他者に対するケアリングによって他者に専心没頭し、私の動機のエネルギーを向け変えることができるように、倫理的なケアリングによって私は疑いや反感や無関心が漂う中にあっても他者のために葛藤することに関与させられる。」(ibid., p.50)

自然なケアリングが生じない時にも「私はすべきである」という当為を導くことができることがノディングスのケアリング論の倫理学たる所以であるが、そうした当為の源泉もノディングスの場合にはカント的な理性の命令によって生じるのではなく、自然なケアリングに立脚した理想的な自己である。

ここで、ノディングスがケアリングそれ自体は他者に対して何をすべきかを決定してくれるわけではないと述べていることに注目したい。ケアリングは他者に「応答しなければならない」という動機を生み出すが、直接何をすべきかを正確には規定しない。このことは自然なケアリングにあっても倫理的なケアリングにおいても同様である。

ノディングス(2010)によれば他者のニーズに応答することが「私はすべきである」の内容を確定する上で重要になる。しかし、何が他者のニーズを満たすことになるかはそのケアする人とケアされる人の関係性の文脈に応じてその都度、判断される余地があると言えるだろう。ケアされる人が直接表現するニーズ、ノディングス(2002)の言葉では表現されたニーズ(expressed needs)を満たすことがニーズへの応答となるのか、ケアする人がケアされる人のために思って仮定するニーズ、ノディングスの言葉では推測されたニーズ(inferred needs)を満たすことがニーズへの応答となるのか、具体的な状況によって異なるだろう。

ケアする人を保育者に置き換えて考えた時、ケアリングの対象である子どもを受容し、理解することで当初の保育目的は子どもにいかに応答すべきであるかという文脈から再構成される。しかし、ケアリングそれ自体はなされるべき応答を規定してくれるわけではないので、保育者の子どもへの応答としての保育目的は専門家としての保育者の判断に常に委ねられることとなる。

Ⅲ. 津守真の保育実践に見られる受容性と応答

次に、ノディングスのケアリング論についての考察が具体的な保育実践の理解にどのように寄与するものであるかを示すことを目的として、津守真の保育実践をこのケアリング論の視点から分析し

てみたい。津守は児童心理学者であるとともに倉橋の影響を受けた保育実践者でもあり、数多くの著作の中で児童心理学者としての理論的洞察にも裏付けられた豊かな保育実践の記録を残している。

初めに津守が子どもの理解について述べた言葉を引用しよう。これは「Ⅱ. ノディングスのケアリング論における受容性の概念 2. 操作的、同化的なモードの放棄から自分自身の変容へ」において考察された、ノディングスのケアリング論における受容としての共感に通ずる洞察を含んでいる。

「理解するとは、自分自身に変化することであって、相手を自分の期待に沿うように、あるいは知識の網の目に入れるように変化させることではない」(津守 2006, p.287)

ノディングス(2013)は操作的、同化的なモードにおいてはありのままの他者を理解することはできず、こうしたモードを放棄して他者を受容することができた時に、自分自身に変容させられると述べていた。ノディングスと同じく、他者理解を操作的な態度の放棄と自己の変化に結びつける思考をくしくもここで津守は表現している。これは津守自身の具体的な保育実践の経験から得られた洞察である。

津守は『子どもの世界をどうみるか』(津守 1994)において上記の言葉を体現するような実践を紹介している。他の子どもの髪を激しく引っ張る行為を繰り返すS夫という子どもに対する理解を巡って津守の考察は展開する。

津守はS夫がこうした行為を通して大人からの注目を求めていること、髪を引っ張る行為をやめさせようとする自分がS夫の存在を受け入れることができず、S夫がその拒否的な視線に気づいているであろうことも知りながら何もできずにいた。

津守はある時、S夫が髪を引っ張る行為をやめさせようとしてS夫の手をつかむときに自分もまたS夫に対して同じことをしているのではないかと気づく。津守は『群衆と権力』の作者であるカネッティがこの著書の中で人間の恐怖の根源が暗闇で背後から肩をつかまれることにあると述べていることを挙げ、S夫の攻撃的な行為の根底には存在を脅かされるような恐怖があるのかもしれないという考察を展開する。

「この子どもは、自らの存在の根底が不確かなのかもしれない。その上に、私がこの子どもの手をつかんで非難の眼を向けたならば、この行動をますます助長することになるのではないか。この場合、優しい眼で見られることを最も欲しているのは、S夫なのだろう。」(津守 1994, p.177)

津守はこうした洞察に基づき、S夫を肯定的な眼で見ることができるよう、S夫と専念して遊ぶことのできる空間である職員室で過ごすことを試みる。そこで、S夫が職員室の引き戸を使って自分と「いない、いない、ばあ」のような遊びを繰り返すのを見て、彼にとって他者が見られることが承認

を意味しておらず、存在感が不確かなものとなっているのではないかと考えるようになる。

「この子どもの場合、見ることが自分自身の喪失感につながることが多い。おとなは小さい子どもをかばい、自分を承認しないのを見る機会が多くある。子どもはその喪失感を補うために、具体的な物を獲得しようとする。つまり、小さい子どもの髪をつかむのである。しかし、子どもが獲得しようとしているのは単に物ではない。もっと存在の根底にかかわることであり、おとなから存在の価値を認められることである。こう考えると、S夫が他の子どもの髪を引っ張るときに、その行動を否定するあまり、S夫との信頼関係をこわしてはならないだろう。」(ibid., p.179)

津守はこのようなS夫に対する理解のもと、大げさなまでにS夫と笑い合っやり取りを続け、信頼関係を築こうとしている。その結果、紆余曲折はあるものの、S夫との間に信頼関係を築き、髪の毛を引っ張る行為も次第に見られなくなっていったという。

ここまでの考察から、津守がこの実践を通してノディングスの言う受容性に基づくケアリング関係の形成と言えるようなプロセスを体現していることがわかる。髪の毛を引っ張るとい目的からS夫に対する操作的、同化的な態度に囚われていた自らのあり方を省察することを通して、津守は次第にS夫を受容し、彼に対する理解を改めていったのだと捉えることができる。津守自身がS夫の受容を通して変化していることがこの実践記録から明らかである。初めに津守が描いていた保育目的(髪を引っ張ることを止めさせる)は、次第に改められたS夫に対する理解に基づく新たな保育目的(存在の根底が不確かなS夫に対し、その存在価値を肯定し、信頼関係を築くこと)へと変化していった。津守自身の理解が変化することにより、S夫に対する倫理的な応答のあり方(「私はすべきである」)も変化したのである。

こうしたS夫に対する津守の受容のプロセスは一時に行われたのではなく、ある程度の期間を要するものであった。津守自身、当初はどうしてこんなことをするのかとS夫を理解することができず、解決の糸口が見出せないままに重苦しい日々を過ごしていたことを認めている。受容が自然には行われぬ、いわば倫理的なケアリングを必要とする状況であったと言えるだろう。こうした状況を変えてS夫の受容を可能にしたのは津守による知性的な省察である。S夫に対する感情的な共振(sympathy)がすぐには生じず、受容ができずにいる時に知性的な省察を通して理解を変化させることが、倫理的なケアリングから自然なケアリングへの移行を可能にしたのである。このことはケアリングにおいて反省的な知性の役割を強調したノディングスの主張と響き合う事実である。

Ⅲ. 総括及び残された課題

本稿ではノディングスのケアリング論の観点から保育者の子ども理解と保育目的の形成について

検討し、保育実践の認識論的、倫理的次元を理論化するための示唆を得ることを試みた。

初めにノディングスのケアリング論を受容性の概念に着目して考察した。ノディングスのケアリング論においては自分の目的に従って対象を変えようという操作的、同化的なモードから受容的なモードへの移行によってありのままの対象を理解することができるのみならず、対象との出会いが自分自身の変容をももたらすことが強調されていた。こうしたプロセスは対象をそれが現れるがままに受容するという受動的側面と、自分自身そうした対象との出会いを通して変容し、対象に対する応答のあり方を考え実践していくという能動的側面を併せ持つものであった。ケアリングにおいては対象(他者)の理解という認識論的次元とそうした理解に基づく対象に(他者)に対する応答のあり方の決定(「私はしなければならない」)という倫理的次元が統合されていた。ノディングスのケアリング論は保育者が子どもの理解に応じて保育目的を変化させ、新たな保育目的を形成していくプロセスを理論化する可能性を内包するものであった。

続いてケアリング理論の考察を通して得られた以上のような示唆を具体的な保育実践の理解へつなげるために津守真の保育実践記録の分析を試みた。ここではS夫という子どもを受容することを通して津守の理解の変化と、S夫への応答としての新たな保育目的(「私はしなければならない」)の形成過程を見た。

本稿で残された課題を二点指摘したい。第一に本稿ではノディングスのケアリング論のみを検討の対象とし、近年のケアリングを巡る様々な研究の成果を考察の俎上に乗せることはできなかった。保育実践を理論化する上でケアリング理論がもつ広範な可能性について汲みつくすためには他の論者のケアリング論についても検討することが求められるだろう。

第二に、ノディングスのケアリング論では受容が生じるための条件(操作的、同化的モードの放棄)については述べられているものの、実際に受容が生じる際のメカニズムについては明らかにされていない。自然なケアリングや津守の実践で見たように倫理的なケアリングから自然的なケアリングへの移行の過程において、保育者が子どもを受容する際にどのような心理的プロセスが生じているのかを明らかにする必要がある。このような研究は保育実践を理論化するための実践的認識論の確立の準備作業となるだろう。

〈注〉

- 1) 佐伯(2013)は村井実がこの問題の解決を「欲する」という命題を人と人との関係における「訴え」という命題へと変質させることに見ていたことを指摘している。
- 2) 1984年出版の初版では関係的アプローチ(relational approach)は女性的アプローチ(feminine approach)とされている。

〈引用文献〉

- Hansen,D.T: Teaching as a moral activity. In V.A.Richardson(Ed.), Handbook of research on teaching(4th ed.) . Washington,DC: American educational research association, 2001, pp.826-857
- 生田久美子: 解題「わざ」から「ケア」へ—知識とは何かを問いつづけて—。「わざ」から知る. 東京大学出版会, 2007, pp.175-199
- 倉橋惣三: 幼稚園真諦. フレーベル館, 2008.
- 村井実: 村井実著作集第(3). 小学館, 1988.
- Noddings, N: Starting at home; Caring and social policy. Berkley and Los Angeles; University of California Press, 2002.
- Noddings,N: The maternal factor; Two paths to morality. Berkley and Los Angeles; University of California Press, 2010.
- Noddings,N: Caring; A relational approach to ethics to moral education. Berkley and Los Angeles; University of California Press, 2013.
- レディ, V (佐伯胖訳): 驚くべき乳幼児の心の世界. ミネルヴァ書房. 2015.
- 佐伯胖: 子どもを「人間としてみる」ということ: 子どもとともにある保育の原点. ミネルヴァ書房, 2013.
- 津守真: 子どもの世界をどうみるか—行為とその意味—. NHKブックス, 1994.
- 津守真: 保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—. ミネルヴァ書房, 2006.
- 上村晶: 保育者の子ども理解に関する研究動向(1) —子どもと保育者の関係性に着目して—. 桜花学園大学研究紀要, 第13号, 2015, pp.19-36